



発行所 郡公民館
西蒲原町
編集人 北川郡
印刷所 北洋印刷株式会社
(西蒲原町、電話204番)

みたままの記

公民館

折りた、みもの講座

巻中 新聞部

六月三日、晩の七時半ごろ公民館で、おりた、みもの講習会があるとのこと、いつてみる。

「ようこそ、会場は二階」と書かれた公民館の玄関に十数足の婦人の下駄がきちんと並んでいる。十四畳の部屋を三つ、つづけた二階に、十七名(女十五名、男二名)の人達が先生を圍んで一生懸命に、のしのようなものをいじっていた。私達も、この人達の仲間に入りいろいろ見学させてもらつた。着料包みや、土産品の包みと、次から次へと先生が席の真中に立たれて一つ一つ説明を加えながら進められてゆく。「出来ましたか」と。先生は端から「これで結好」「これ

ではいけないですね」とまわがつかっているのは正しく折つて見せていく。八時半に十分間の休憩がある。先生がわざわざこの休憩時間に私達に折たみもののお話をして下さつた。のしには一五〇種位もあつて、それぞれに水引をつけることになつていて、そして普通ののし以外に六歌仙、右大臣、左大臣等のものもあり、又水引には白と赤、それから金と銀が非常に多く使用されているが、その他に白、茶、桃色、緑、紫などのものもつかうことでした。金、銀、その外いろいろの色を使つて鶴や亀、寶船等を作つたものを見せていただいた。

この様なむすかしい物ははともかく、私達が一寸した時に間にあうような折りたみものは知つておいた方がよいのではないかと思つた。中には子供さんを膝の上にあやしなから習つていて、婦人の方、そしてこの講習が特に女の人が多いせいもか仲々賑かだ。隣同士で教えたり教えられたり、時々小さな笑聲が起り、うるさいと言ひ程のこともないが、和やかといつた方が當つてゐる様だ。やがて十分間の休憩が終ると又先生の一つ一つの説明に注目し耳



を傾けている。次に習いにきて居る皆さんに感想をきいてみる。「私達が今習つている、このたみものは、私達の日常生活に欠、この出来ないものばかりで、人様に何かやる、き、正しい折りかたで、しかも美しいものを安心してあげて下さるのです、ひまの時などよく練習をしておきたいと思ひます」と語つて下さつた。九時近く公民館を辞して歸つた。

公民館主催の折りたみもの講座は、去月末から五日まで開かれた。本間徹水氏を講師に毎日約二十名の受講者を集め、熱心に受講した。

夕食時のひととき

私のうちでは

どの家庭でも、一日のうち家族が揃つてしかもゆつくりとした気分をひたる時、と言つたら、一日の勞働より解放され、何や、かにやと語り合う夕食の団樂のひと時である。又この様なひと時を皆んな望んでいる。がしかし商売の都合や職場の関係で別々になる家庭もある。小学五年生以上中学生を対象にその実態を調査いたしました結果次の如くであつた。

- (対象二二一名)
- 一、夕御飯を家族揃つてたべますか
 - たべる 九六六
 - たべない 一四五
- 二、夕御飯を家族揃つてたべない一四五のうち
 - お父さんは別 八六
 - これを職業別に見ると
 - 農業 七
 - 商業 二三
 - 工業(経営者又工員) 三八
 - 無職 一
 - その他 一七
 - おちいさん、おばあさん、お兄さん、お姉さん、お中だけ別 一一
 - 兄さんは別 八
 - (仕事(の都合))



町会議だより
一、消防自動車増置決定
二、消防防強化について
三、過般來、町出身者
四、外居住者及町内関係者の御協力を懇請中の処
五、今回大目見透しを得たので自動車ポンプ一台(新合、価格百六十万円)を購入することに
なり、予算措置を近く講ずる旨、町長より議会に報告があつた。
二、会議開催状況
五月二十八日
町議会第三回臨時会
出席 二十名
欠席 六名
議決した主な議案は次の通り
一、本年度第二回追加予算(累計三九、三六一、七三八円)
二、本年度国保第一回追加予算
五月九日
土木委員会
鏝鄉村耕地整理により町に於ける払下げを受ける舊水路について、現地視察を行い、これが利用方法について検討した。
五月十二日及二十五日
消防委員会
常備消防の強化について検討
五月十九日
厚生委員会
保育所の件について
五月二十五日
財務委員会
市町村民税、税率について
五月二十六日
議員協議会



過日のある座談会で「日本国民の貧乏の原因は何か」という問題が取りあげられたが結論的に言えば物の生産に對してこれを食う人間の頭数が多過ぎるからだといふ事になる。敗戦後日本の領土は半減されそれに加えて外地からの引揚同胞を迎えて今残された四つの島に八千万人がひしめき合つて居る。日本の人口は今二十六秒間に一人づつふえてゆくそうだがこれから計算してみると今後六十六年目には丁度人口は現在の倍數になるといふ勘定になる。これでは如何に科学の進歩があろうとも日本国民の生存は不可能だといふことになる。限られた国土と資源しか持たない日本人の野放しの人口の増殖は考へても空恐ろしいことだ。吾々のもつと眞剣に考へてかからねばならぬ問題ではなからうか。現在の産兒制限の奨励位では追つていかない。今後何十年間二人以上の子供を生むべからずといふ法令でも定められない日本国民の貧乏は永久に救れないであろう

出づる郷

久保田英一

中学を卒業し、郷里を出て以来、二十九年、爾來風来坊よろしく各地を轉々としてゐるわけであるから、その意味では「出郷見郷」に執筆する資格だけはあろうに思へる。

詩人石川啄木は「古里の山に向ひて言ふことなし、古里の山はありがたきかな」と申しているが、生れ故郷のよさに心ひかれることは、理くつではとても割り切れるものではない。ノスタルジヤ、これは人間の本性かも知れない。朝に夕べに仰いだ鬮彦の靈峯、西川の流ればもとより、今から思えばつららぬ子供時代の食物の末に至るまで、時に思郷の念已み難いものがある。淡い感傷をあつさり片づけてしまえばそれまでのことであるが、矢張り弱い人間の故郷でも言ふものか。古里の訛が取り持つ縁で同郷人と相識る機会も乏くないがとにかく嬉しいことである。

未だ両親も健在なので年に一度は必ず歸郷することにしているが、その途次越後平野を窓外に眺めると何となし

浮々とした心境は我のみぞ知る心のオアシスでもあろうか。

他郷に漂浪して感心する古里のよさの第一は郷土の人々のなりふり構わず実によく働くことである。自然的、社会的諸条件の爲もあるが、永年の慣習によるのかも思ふが、「質実」「粘り強さ」

いづれも越後人共通の誇るべき偉大な特異性とも言える。特に婦人のよく働くことなど他の土地では到底想像もできない驚くべき事実である。

国土狭隘資源に乏しく、しかも人口過剰に苦悶する日本の現状に於いてこの越後人特有



讀書室

鸛尾 莒市

民俗学研究所同人著 民俗学の話 三部に分れて数篇になつてゐる

「所変れば品変る」と言ひ、諺があるが、各地町、農山村の昔からの

の旺盛な勤勞意慾は極めて高く評価せねばならぬ。

次にこの機会にいささか老婆心まで申上げたことは言葉遣いをも少し何とか改められないものかと思ふことである。成程適度の言葉は却つて郷土色豊かに、親し味をさへ

目にも感じ出る。言葉は別に経済的負担を伴うわけのものでもなく、又社會的地位の上下によつて余り差等のあるべきものでもないから、他の土地に比べて余りぞんざいな言葉遣い

生活、習慣、行事の成立等が書いてあり、こんな習慣の所もあるかと思はされる。又越後の町や農山村で現在実際に習慣行事となつて

千種 秀男
アンネの日記……光ほのかに

彼女が希つたのは平和に生き、人間として幸福に暮らしたいという事であつたがこの希望を、むざむざ蹂躪したのは、戦争という名の

けは是非よくしたい。殊更上品ぶれたどと野暮なことを言つてゐるのではないが、

更に氣候の点については積雪、降雪量共に多く御世辞にもよいとは言へない。目もあけられぬ吹雪のこと、あの陰うつな雲のことなど。思い出すだに心を暗くせざるを得ない。

これは人爲を以て如何ともし難いことではあるが、冬季間の利用、氣候に應ずる施設など自然を克服する機まざる努力と工夫が續けられねばならない。若し

暴力であつた、(十三才)の少女アンネがいかに鋭く大人の世界をみつめ思春期の歡びや悩みを、実に生き生きと書きそして苦しい生活の中にも明るく生きようとしてゐる事に感心する。

基地の子
基地の子供達は、日夜、風紀、騒音、危険にさらされてゐる。なにも罪のない子供達の切実なる声を現はした作文集を全部の人達に見てもらいたいものである。

最後にできるならば町費による育英制度の創設によつて将来人材の養成を是非実現して

× 當地方は南國のこととて降雪は年に一度ちよつぱり申すの比較的少いから氣候は申し分ない。農家は米麦の二毛作、耕作反別は少い割に農家の構えが概して

園に面してゐるので到る処風光明媚、日本海岸とは景趣も稍異つてゐる。高松市内には日本一の栗林公園、近くにお馴染みの金比羅さん、或は屋島の景勝地

巻海紅句金

於仁箇村万福寺

山鳩のこゑとんできこいて雪折竹は依然なだれて
人なにかつかまむ心竹の葉の散る風にある
丸山紅林子
須貝 秀
この部屋山に抱擁一草一木処女にも似て
村井 孝平
春夜満ちたりており子の寝顔にすこし泥がついてゐる
石山与志夫
浮子すんずん流る想ひかつこころは遠くにも啼えて
竹部 木魚
山が濡るるか本堂太き柱をめぐる妄念
笛木 杜松
木の香り家が組まれて行く藤の房に微風
土田 耕人
父の忌近づくある日は山鳩の声一つ
大樹 金子 曙山
尋ねあぐんで春の陽の落ちる山門の
小鳥かすかに鳴くを崖のつちがしげる
細山 金剛
如來に抱かれまます山の寺の蝕める疊の上に
また一と雨来る齒染のしげり葉雪の下の憂に

勞作うた

田の草取り
おいた田の草
とら
五月終いたら、にげま
しうで
秋がきたかとモミジに
しか(鹿)と相談する
がよい
おまい松の木
ワシヤ

くるみの木
おして目出たいウルシ
の木
くよくするなよ
ウ
キヨは車
ぼたんもこもきて春を
待つ

- 加藤忠平氏(六七) 八区 四月三日
- 本間高治氏(六八) 六区 四月十一日
- 鈴木タミ氏(四〇) 七区 四月十七日
- 伊藤源二郎氏(六一) 八区 四月十八日
- 若杉杉松氏(七三) 一区 四月十九日
- 久保田勝衛氏(四一) 七区 五月十一日
- 長谷川喜津一氏(〇) 四区 五月十三日
- 田辺義久氏(三三) 六區 五月十五日
- 羽生タフ氏(七八) 十二区 五月十八日
- 酒井仁司氏(三五) 一区 五月二十日
- 岡田タカ氏(七四) 五区 五月二十六日